

# 「金剛塚と蛇」

「けせんぬま 口碑伝説散歩」から

前沢(高谷・鶴巻)地区

「金剛」というからには、金と大いに関係あるう。言い伝えによれば、大昔、加賀の国から来た修験者が黄金の宝鐘とともに塚の中に埋まったとか。確かなことは分からない。明治の初め、腕つぶしの強い村の若者たちが宝鐘を掘り出そうとした。言い伝えを確かめ、よしんば宝鐘を手に入れて大もうけしようというのだ。血気にまかせて土をほりかえしていると、突然、全員が同時に、腹部に強烈な痛みを感じた。もはや掘ることはかなわない。そういうことがあったと。



さて、その修験者のこと。熊野信仰を広げるため松崎村にやって来た老齡の山伏であった。病にかかり、この地で自らの死期をさとした。修験者は、小乗仏教修験者としての最期のしきたり、即身仏にならんと決心した。村の信者たちに深い穴を掘らせ、次のように言いつけた。

「わが身病を得たり。長年仏門にありて願いしこと、即身仏なり。これ、喜ばしきかな。拙僧、土中より黄金の鐘鳴らす間、未だ成仏せざるなり。鐘の音聞こゆれば竹筒に水入れ給え。我、成仏せし後、入滅のこの地に塚を建て給え。光る目をもつ大蛇、この塚を守らん。なんびとも塚山に近寄るなかれ。塚の主たる大蛇すむ限り、この地栄えうるおう。」



修験者はわずかな食糧をもって土中に消えた。七日七晩たった翌朝、鐘の音は聞こえなくなっていた。村の者は、修験者の言いつけどおりに塚を建て、「金剛塚」と名付けた。そして、この塚には絶対に近づかぬよう、塚のある山を禁忌の山とした。

それから何百年かが過ぎた江戸期の頃である。

村人は、禁忌の山の太木に覆われた塚に大蛇が巢食うと噂していた。

この村に儀之助というきこりが夫婦で住んでいた。病弱な妻を養うために、困り果

てた儀之助は、思い余って、とうとう禁忌の山に分け入ってしまった。馬を引いて山に入ると、手つかずのこの山には、コナラやブナが多くあった。

「おお、薪や炭作りについてつけの木がどっさりじゃ。」

儀之助は夢中になって木を切った。汗をふきながら、ふと空を見上げた。この森閑な山は何か他の山とは様子が違う。巨大すぎるほどの杉の老木が林立しているというのに、いくら目を凝らしても、耳を澄ましても、杉の枝々はしんとして、鳥の一羽もない。



「おかしいな。これほどの大木であれば、カラスやトンビが巣をつくるものだが…」  
馬の背にどっさりと木々を積み込み、山からもどった儀之助は、松崎村で木を商人に

売った。

「これは、これは、まことによい薪の木じゃ。儀之助どん、いったいどの山でこんなによい木を手に入れたものかい。」

商人が儀之助に問うた。儀之助は、禁忌の山からとは言えず、

「長の森からとってきたんで…あんまり遠くてほとほと難儀しやした。」

と、うそを言った。商人は、ほほう、とうなずきながら、

「これからは、是非にも儀之助さんからこの薪を買い入れたい。今少し高い値で買い取らせてもらいますんで、どうかよその商人には売らないでいただきたい。」

と言った。

「わかりやした。だんな、これからもよろしくおねげしますだ。」

その後儀之助は、家を金剛塚の近くに建て、毎日毎日きこり仕事に汗を流した。薪の代金で高価な薬を買いうことができたので、儀之助の妻は、もどどりの元気な体になった。子供ももうけて幸せなくらしをするうちに、儀之助は金剛塚の山が禁忌の山であることを忘れてしまった。

何年かたった真夏の夜のことである。昼間の熱気のためだろうか、夜中にな

って大きな雷が鳴り始めた。とびおきた妻は儀之助を起こそうとした。だが、昼の疲れのためか儀之助はびくりともしない。外は、言葉にできないほどの稲光と豪雨で荒れ狂っている。何度目かの稲光がしたその時のことだ。何か丸いものが二つ、妻の目にう



つた。その丸いものは、不気味に青白く光りながら二つならんで動いていた。右へ左へ、また右へ左へと何かをさがすように動きながら、地響きにも似たうなり声をあげて儀之助の家に迫ってきた。

「た、た、助けてえー。」

妻は悲鳴をあげた。この声で目を覚ました儀之助は、寝ぼけ顔で妻の方を見た。

「な、な、なんだあー。こりゃあ、何なんだあー。」

儀之助は大声をあげ、のけぞった。青白く光る二つの玉が家に襲いかかってきた…と思いう間に家を乗り越え、何十間もある杉木立をすすると登り、越え、面瀬川の方へと向かって行った。儀之助も妻も腰を抜かしたままだった。声が出ない。体も動かない。二人ともただぼう然としていた。

次の日、昼近くになってから、やっと二人はあらしの後片付けを始めた。昨夜、光るものが通った跡や杉の木の幹には、透明な、手のひらほどの大きなうろこのようなものが散らばっていた。このうろこは、面瀬川でも、尾崎の海でも見つかかった。儀之助たちは、初めて、禁忌の山である金剛塚を守っていた大蛇が二人の家を襲ったものであることを知った。



その後、あの杉木立には、たくさんの獣や鳥がすみつくようになった。かつて森閑と



していた禁忌の山はおだやかな森となった。ただ、これまでとはちがひ、村を飢饉がおそつたり、疫病がはやつたりもした。村人はみな「金剛塚のたたり」とうわさした。儀之助夫婦は、禁忌の山に分け入つてくらした罪で、村からの追放を言い渡された。二人は幼子を連れ、いづこかへ去つたと伝えられる。昔からの言い伝えというものは、よくよく守るべきである。



さて、金剛塚の主はどうなったのか。大蛇は、尾崎村から海を渡り、大島亀山の山頂近く「田の神様（大島神社）」にすみつくようになったとのことである。大島神社では、田螺（たにし）がご神体の大岩を守っていたので、大蛇は身を小さくして神社の周辺に棲んだそう。

↑ 金剛塚

